2017 年度第 3 回物学研究会レポート

「ヤマハ発動機イノベーションセンター見学会報告」

2017 年 6 月 12 日

物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

６月の定例会は、物学研究会メンバーのヤマハ発動機デザイン本部長、長屋明浩さんはじめ、同社皆さまのご協力をいただき、今年１月にオープンした「イノベーションセンター」の見学会を行いました。見学会では、イノベーションセンター5 階にあるプレゼンテーションシアターで、長屋本部長より、ヤマハ発動機デザイン本部の活動、イノベーションセンター建設の背景などを、映像を交えながらプレゼンテ―ションいただきました。

残念ながら、ヤマハ発動機の技術、製品開発の中枢であるイノベーションセンターの模様はお伝えできませんが、ここを拠点に魅力的なプロジェクト、製品の誕生が期待されます。

今回は内見会の模様を、時間軸にそって、簡単にレポートいたします。

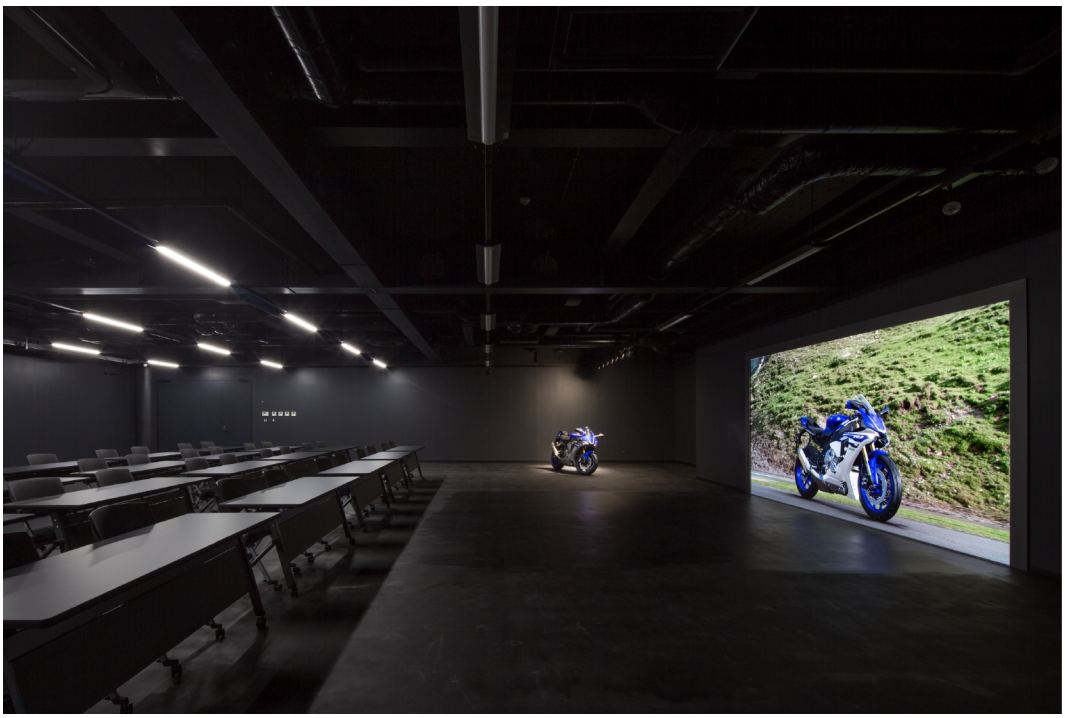
■13:45 ヤマハ発動機コミュニケーションプラザ到着

同プラザはヤマハ発動機の製品を一堂に見学できる大規模な施設。イノベーションセンター見学前に同社の精神を体感できる。

01_コミュニケーションプラザ１階、２階はショールームとして、製品が展示されている。訪問者は自由に見学できる。

■14:00 イノベーションセンター到着、長屋本部長のプレゼン、施設見学

コミュニケーションプラザからイノベーションセンターに移動し、そのまま 5 階のプレゼンテーションシアターへ。



02_プレゼンテーションシアターの様子

長屋デザイン本部長より、ヤマハ発動機の沿革、同デザイン本部の活動、イノベーションセンター建設のいきさつなどの話をうかがう。プレゼンのポイントは以下の通り。

・ヤマハ発動機を「発」な会社へデザインする背景となるのが、「創造的なコンセプト」、「卓越した技術」、「洗練され躍動感あふれるデザイン」である。

・価値創造の源である「ヤマハらしさ」の探求に不可欠なのは、「発――創造的なコンセプト」、「悦・信――喜びと信頼の背景となる技術」、「魅――洗練されたデザイン」、「結――顧客とのつながり」である。

・ヤマハ発動機のデザインビジョンは「Awakening Passion―心を一瞬でわしづかみにする独創性」、「Brilliant Beacon―人々と共に暮らしを輝かせる」、「Lasting Integrity―本質が時を超えて信頼につながる」、「Elegance in Motion―しなやかで軽快な美しい動き」を体現する製品であり事業である。

・マーケティングや製品開発においては、買い手や使い手側発想の「マーケットイン」と、技術や設備など生産側発想の「プロダクトアウト」というアプローチが一般的。ヤマハ発動機ではそのどちらでもない「プロダクトイン」という、両者を融合させた新しい手法を模索、実践していく。

・現在デザイン本部では、ヤマハらしさの探求、プロダクトインにつながる多様なプロジェクトを実行している。その一つがコンセプトモデルのデザインで、「GEN　Series」と命名し、開発と提案を継続している。

「GEN」は、「Genesis(先駆者)」と「Generate（発動）」の 2 語から着想したネーミング。現在まで、01GEN から 06GEN までを制作し、モーターショー、大三島（建築家伊東豊雄氏の島起こしプロジェクトと共働）で発表し、話題となった。

・ふたつのヤマハ（ヤマハ発動機とヤマハ）の協働による「ヤマハらしさ」の探求プロジェクトも実行。初回は、楽器とモビリティのデザイナーが入れ替わって、新しい発想による楽器とモビリティデザインを制作した「プロジェクトアーメイ」。2 回目は二つのデザイン部のデザイナーの協働による音楽装置や電動アシスト車いすなどを制作し、六本木ヒルズを舞台に発表。不特定多数の一般の人々が実際にそれらを体感した。

・その他、未来のデザイナー育成を目的とした教育プロジェクト「ヤマハ・クリエイティブ・ハッカソン」、ブランド発信の拠点となるショーやイベント、ショールームなどの空間デザインにも着手。特に後者は、ヤマハ発動機のブランドを共有できる空間をかたちづくる「ブースデザイン・モジュールシステム」を開発し、国内のみならず海外のヤマハ発動機のショーやイベントの空間づくりの重要なコンテンツになっている。

・「イノベーションセンター」は、デザイン司令塔として、デザイナーとエンジニアとの日常的なコラボレーションの場を意図して建設。当初は「デザインセンター」の名称だったが、先進的なイノベーションを生み出す先行デザインの拠点、さらにオープンイノベーションの基地としての期待から、「イノベーションセンター」と命名した。

03_イノベーションセンターの外観と内部

・イノベーションセンターは、ワークショップ、デザインラボ、クレイルームなどさまざまな機能を有しているが、なるべく壁で仕切らないオープンスペースで、目的や時間に応じて、ミーティングしたり、ライブラリーになったり、時には寛ぎの場になったり、自由度が高いスペースになっている。

　また心地よさ、流行には左右されない空間を目指し、オーセンティックなデザインでまとめている。

・今後、イノベーションセンターを活かしながら、ヤマハ発動機らしい、魅力ある技術、製品、事業づくりを実践したい。

04_クレイルーム、写真スタジオの様子

■15:40 コミュニケーションプラザにて Q&A

見学会を終え、物学研究会メンバーと長屋デザイン本部長との質疑応答。

Q1：イノベーションセンターへの反応は？

A：見学会や取材の申し込みが多く、予想以上の反響をいただき、今後に向けた手ごたえを感じている。

Q2：オープンイノベーションの拠点ということだが、具体的にはどのように活かしていくのか？

A：ヤマハ発動機では今までも GK デザインなど外部とのコラボレーションを行ってきた。ヤマハ発動機のデザイン本部の現在の人材は、デザイナーは全体の４５％、５５％は非デザイナーで、さまざまな専門家がいる。ここでは社内と社外の多様な人材が交わり、コラボレーションを実践しながら、従来の枠組みにとらわれない自由なイノベーションを仕掛けていきたいと考えている。

05_コミュニケーションプラザでの質疑応答の様子

■16:00 コミュニケーションプラザ出発 帰路へ

長屋本部長はじめ、ヤマハ発動機の皆さまのご協力をいただき、充実した見学会となりました。ありがとうございました。

以上

2017 年度 第 3 回物学研究会レポート

「ヤマハ発動機イノベーションセンター見学会報告」

写真・図版提供

01, 05 物学研究会
02, 03, 04 ヤマハ発動機株式会社

編集=物学研究会事務局
文責=関 康子

● ［物学研究会レポート］に記載の全てのブランド名および
商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
● ［物学研究会レポート］に収録されている全てのコンテンツの
無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998～2017 BUTSUGAKU Research Institute.